

フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討 (2)
—フッサールの擁護を中心に—

Survey of Previous Studies on Husserl's Theory of the Other (2):
Focusing on the Defense of Husserl

佐藤 大介
SATO, Daisuke

フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討 (2)

——フッサールの擁護を中心に——

佐藤大介*

はじめに

本論は「フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討 (1) ——フッサールへの批判を中心に——」(以下では簡潔に「先行研究の整理 (1)」と記す)の続論である。

「先行研究の整理 (1)」では、まず、『デカルト的省察』第五省察(以下では簡潔に「第五省察」と記す)でのフッサール他者論を簡単に確認した。それは、ごく簡潔に言えば、次のようなものであった。私に固有な領分、すなわち原初的領分(Primordialsphäre)において、私の身体物体性(Leibkörperlichkeit)が経験される。そして、この私の身体物体と類似した物体が眼前に現れるならば、その物体も私と同様な身体物体と見做され、その眼前の物体は私と同じような意識をもっているものとして、すなわち他者として、経験される。こうした経験では、原初的領分において生じていることが、その物体へと移し入れられている。フッサールは、このように他者経験について説明しており、この説明を移入(Einfühlung)の理論と呼んでいる。

そして、「先行研究の整理 (1)」では、フッサール他者論に対する先行研究の批判を、その批判の要点から、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘するもの、(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘するもの、(C)〈分析の不徹底〉を指摘するもの、これら三つに大別して整理した。(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判では、他者に対する自我の優位性が批判の要点となる。すなわち、移入において自我は、移入するものとして他者に対する優位性が認められるため、移入において構成される他者は、私と同格的なものではないと、論じられる。こうした批判を呈示した代表的な論者が、トイニッセンやヴァルデンフェルスである。(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判では、自我の疑似二重化が批判の要点となる。すなわち、移入において構成される他者は自我の疑似的な変様態でしかなく、そこでは現実的な他者が構成されないと、論じられる。こうした批判を呈示した代表的な論者が、ヘルトや斎藤である。(C)〈分析の不徹底〉を指摘する批判では、発生的分析の不十分さが批判の要点となる。すなわち、フッサール他者論においては、他者という意味構造の静態的分析にとどまっており、他者という意味がどのように発生するのが十分に解明されていないと、論じられる。こうした批判を呈示した代表的な論者が、榊原である。

本論の目的は、フッサール他者論を上述の批判から擁護する先行研究を整理し、それぞれの先行

* 岡山大学大学院社会文化科学研究科客員研究員

研究の議論を比較検討することで、フッサール他者論に関して残された論点を明確にすることである。そのために本論では、「先行研究の整理 (1)」と同様に、①原初的領分の解釈、②移入理論の再構成、③反論の要点、これら三点に着目して先行研究を整理する。②では特に、対象に移入されるもの、移入に関する意識の働き、移入の根拠がどのように理解されているのかを、確認する。①と②に着目すれば、各先行研究においてフッサール他者論がどのように理解されているのかを、掴むことができる。また、③では、各先行研究が反論のターゲットとする批判をどのように理解しているのかをみたくて、その反論の要点を確認する。各先行研究の反論は、本論で詳しく確認するように、先述の三つに区別した批判それぞれに対応する反論として分類できる。

本論では、次の手順で考察を進める¹。まず、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘した批判に反論するものとして、田口茂『フッサールにおける〈原自我〉の問題』、鈴木崇志『フッサールの他者論から倫理学へ』を整理する(第1節、第2節)。次に、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘した批判、(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘した批判、これらそれぞれに反論する先行研究として、アントニオ・F・アグイーレ『フッサール現象学』を整理する(第3節)。次に、(C)〈分析の不徹底〉を指摘する批判に明示的に反論してはいないが、反論を引き出せる先行研究として、浜渦辰二『フッサール間主観性の現象学』を整理する(第4節)。そして、フッサール他者論に対する批判と擁護を比較検討し、議論の余地を明確にする(第5節)。

なお、「構成 (Konstitution)」については、「ものごとが意識との連関の中で『意味 (Sinn)』として現れ出ること」という、「先行研究の整理 (1)」での解釈を引き継ぐ。この解釈は、本論で取り上げる論者が共有しうる最小の解釈であろう。各論者がそれ以上の解釈をどのように呈示しているのかについては、本論での整理に深く関わらない限り立ち入らないでおく。

第1節 田口茂『フッサールにおける〈原自我〉の問題——自己の自明な〈近さ〉への問い』

田口は『フッサールにおける〈原自我〉の問題』²の中で、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判に反対する議論を、呈示している。同書の目的は、フッサールの「原自我 (Ur-Ich)」概念を、フッサール自身のテキストに即して理解可能にするところにある (cf. 1, 5)。そのために田口は、まず、フッサールが自我という問題圏へと踏み込んでゆくことになる道筋を、年代的展開に沿って追跡する (cf. 6)。こうした追跡を通じて、「現象学する自我」、すなわち「『いまここに』『現に』生きている者の『アクチュアリティ』」を特徴とする自我が、フッサール現象学において重要な役割を担うものとして浮き彫りにされる。田口によれば、こうした自我によって現象学者の或る「独特の哲学的孤独」(Hua VI, 187-188)が際立てられる文脈において、原自我という概念が登場

¹ なお、国内の先行研究の間では、フッサール他者論におけるいくつかの術語について訳語が異なっているが、本論においては「先行研究の整理 (1)」と同様に訳語を統一した (cf. 佐藤 [2021, 214])。

² 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

する (cf. 8)。田口はこの原自我の独特な性格を解釈していく中で、上の批判に対する反論を呈示している。

田口は、フッサールの呈示した原自我を解釈するにあたって、「変様 (Modifikation)」概念に着目している (cf. 192)。この概念に関する田口の理解について、確認しておこう。

田口によると、フッサールにおける変様概念とは一般に、意識が何かしら変化することを指し、この変様態は自身の意味において、その原様態を遡する (cf. 186-188, 212-213)。こうした変様現象の一つが、現在の意識が過去の意識へと流れゆく現象である。過去は変様された現在であるという意味をもち、この意味がその原様態としての現在を遡行的に指し示している。このように変様は、意味変様として理解されるべきであって、心理学的・実在的な発生のように理解されてはならない。

田口は変様の基本構造を、「唯一性」と「等置」という二つの概念を用いて、より精確に描き出す (cf. 188-192, 216-219)。

田口の解釈によると原様態は、変様態に対して「唯一性」を具える。これは、原様態が諸変様態に対してその意味源泉として逆転不可能な関係をもち、その逆転不可能性において比類ない特殊位置を占めることを指す。つまり、原様態は諸変様態と同格に並んでいるわけではない。例えば、時間の流れを生き生きと感じ取っている今は、常に今でありながら根源的に流れゆく今であって、これの変様態である過去や未来と同列に並ぶものではない。ただし、原様態が変様態へと移行すると、この変様態は、他の様々な変様態との関係性の中に並置的に意味づけられる。例えば、根源的今の変様態である過去は、さらなる過去と並置される。

また、田口の解釈によると、原様態が変様態へと移行した際、原様態の「等置」も帰結する。これは、原様態が諸変様態との意味連関の中に置かれ、諸変様態と比較可能なかたちで並列的になる事態を指す。先の例に照らして言えば、過ぎ去った今である過去に対して、まさに今である現在が、同じ今という意味連関において並列的になる。このように等置された原様態は、原様態としての唯一性を、変様態に対する非-変様態として保持している。例えば、過去-現在-未来というように、諸々の他の時間様態のうちの一つの時間様態である現在は、もはや変様を識らない現在ではないが、それでもなおそれは、原様態としての唯一性を、過去や未来といった変様態に対する非-変様態として、保持しているのである。

田口によれば、以上のような変様が自我に関しても当てはまる (cf. 212-219, 227, 270)。原様態としての自我が、今まさに生き生きと働いている具体的な自我、フッサールの呈示した原自我である。これに対して、変様態としての自我は、そのように生き生きと働いてはいない自我であり、そのつどの在り方において現れ、他の諸変様態としての自我と並置された自我である。自我は、変様態としてそのつど現れ出るだけで、原様態としては現れ出ない。原様態としての自我は、自己変様を蒙ることでいわば隠蔽される。しかし、原様態としての自我は、ほかならぬこの隠蔽においてこ

そ、自己自身を指し示している。すなわち、変様態として構成された自我の具える意味、〈今まさに生き生きと働いている私ではない〉という意味において、原様態としての自我が遡って示されている。

① 原初的領分の解釈

田口によると、フッサールが呈示した原初的領分とは、経験されうるもの全体からあらゆる異他的なものを抽象した、私に固有なものである (cf. 196)。田口は、その抽象の手續きにおいてすでに、抽象的に遮断されるべき異他的なものという意味が前提されていると、指摘する (cf. 196)。すなわち、異他的なるものと私に固有なものとがあらかじめ区別されていることではじめて、異他的なるものを限定的に遮断し、私に固有なものを異他的なるものとの対比において際立てることができる。田口によれば、こうして見出される私に固有なものは、自我の原様態そのものではなく、「すでに変様態と等置された原様態」であって、その意味の上で、すでに遂行された変様に依存している (cf. 196-197)。つまり、「実際フッサールは、『私に固有なもの』をさしあたり『異他的でないもの』(Nicht-Fremdes) と規定している」(196; cf. Hua I, 126) ように、私に固有なものは、これの変様態である異他的なものとの並列的な比較において、「非異他的なもの」として「間接的に」性格づけられているのである (cf. 196-197; Hua I, 131)。

② 移入理論の再構成

田口は、変様論を核心に据えて、「第五省察」での他者論を再構成している (cf. 192)。つまり、田口によるとその理論では、変様論が決定的な役割を果たしており、他者という意味が自我の「意味変様」において構成されるということが、呈示されたのである。

こうした再構成の中で田口は、原初的領分においていつでも原本的に成り立っている意味が対象に移入されると、理解している (cf. 194, 205)。例えば、私の身体や私のエゴは、いつでも原初的領分において意識されており、そこで捉えられている「身体」や「エゴ」という意味が、他者経験において対象に移入されるのである。

また、田口によると、フッサールが移入における意識の働きとして論じた「類比的統覚」は、変様として理解されねばならない (cf. 194)。こうした理解について田口は、『デカルト的省察』だけでなく『第一哲学』やいくつかの草稿も典拠としながら、次のように論じている (cf. 194, 205, 225-228)。その類比的統覚は、類比における原本がいつも同時に生き生きと働いている点、変様された意味によって指示されているものがそれ自体として原本的に現れることはない点、これら二つを特徴とする。前者の特徴は、原様態としての私の身体や私のエゴが、気づかれるかどうかにかかわらず、いつも原本として意識されており、他者経験においても必然的に居合わせている事態を表す。すなわち、他者という変様された意味が妥当するようになるとき、その原様態的な意味が、

単に遡行的に指示されるだけではなく、そこで同時に生き生きと働いているのである。また、後者の特徴は、他者経験では「異他化すること」としての変様として、自我の原様態そのものが「多重化」されている事態を表す。すなわち、『他者』という変様された意味は、『私の』自我自身を意味的原様態として遡行的に指示しているのみではなく、『他者の』自我自身を、一つの絶対的に異他化され隠蔽された原様態として指示している」(194)のである。

なお、田口は、移入における意識が何を根拠としているのかについて、明示的に取り上げてはいない。田口が「第五省察」での他者論を取り上げた主な目的は、その他者論の核心に変様概念がある点を浮き彫りにするところにある (cf. 192, 198)、そのためには、移入の根拠について立ち入る必要はなかったであろう。

③ 反論の要点

田口は、フッサール他者論へのトイニッセンの批判に反論しており、これが (A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判への反論に相当する。

田口によるとトイニッセンは、フッサールにおける原自我を個体的自我と解釈することで、他者論においてフッサールが独我論に陥っていると、批判している。つまり、自我と他者との構成の中心である原自我が個体的自我であれば、「あたかも他者に向かって『君たちは私の意識の産物である』と宣言するに等しいように見える」のであり、トイニッセンが論じるように、原自我は「等根源的なパートナー」を欠いた非社会的なものとなろう (cf. 155-156; Theunissen [1965, 151ff., 155])³。

こうした批判に対して、田口は、それは原自我についてカテゴリー・ミステイクを犯したうえで展開されたものだと、反論している (cf. 156-157, 163-164)。この反論において田口は、トイニッセンが原自我を解釈した次の一節に着目している (cf. 156)。

原自我の絶対性は、その『孤独』のうちにある [...]。とはいえその孤独とは、私の隣にいかなる自我も存在しないがゆえに、共同性への一切の渴望から自由でもある。(Theunissen [1965, 23])

田口によると、上の一節から窺えるように、トイニッセンは、『私、汝、われわれ』等々からなる相対的關係のシステム」、すなわち「間主観的意味構造のシステム」を前提して原自我を解釈しており、原自我を「普通の意味での自我」、すなわち「同格的な他者に対する自我」と誤ってすり替えてしまった (cf. 156)。田口の解釈によれば、原自我は、間主観的意味構造のシステムを可能にするものであり、間主観的意味構造に徹底的なエポケーが施されることによってはじめて主題化さ

³ 田口は初版 (1965年) を用いているが、「先行研究の整理 (1)」では第二版 (1977年) を用いた。第二版は「第二版への序文」が冒頭に付け加えられた以外は初版と同じであり、内容や頁番号に変わりはない。

れる。トイニッセンはこうした点を見落とししたうえで、原自我が間主観的意味構造の中で他者に対する存在論的優位をもつと誤解し、上の独我論批判を展開したと、田口は指摘するのである (cf. 155-156)。

田口は、徹底的なエポケーが施されたうえでフッサールの原自我論および他者論が展開されていることを、強調する (cf. 156-157, 163-164)。そのエポケーの意図は、間主観性の意味的構造を前提するのを差し控えることによって、その意味的構造を「可視的に」あるいは「理解可能に」するところにあり、フッサールは諸主観の等根源性という自明な事実をいささかも疑っていない。田口によれば、フッサールは徹底的エポケーを施したうえで、その等根源性という意味を原自我の変様に基づいて理解しようとするのである。

第2節 鈴木崇志『フッサールの他者論から倫理学へ』

鈴木は『フッサールの他者論から倫理学へ』⁴の中で、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判に反対する議論を、呈示している。同書の目的は、フッサールの他者論から倫理学への突破口を開くことであり (cf. i)、より具体的に言えば、『『私』と倫理的関係を結びうる『君』について哲学的に論じるための場所』を確保することである (cf. iv)。そのために鈴木は、フッサール他者論を突き詰めていく (cf. iv)。というのも、鈴木によれば、倫理は社会規範の一種であり、社会の成員は私だけではなく他者をも含む以上、「倫理についての問いは社会についての問いへ、さらに社会についての問いは他者についての問いへと送り返される」からである (cf. ii)。こうした文脈において鈴木は、フッサールの文献研究の枠内で、フッサール他者論の全体像を、「伝達」に関する部門を含むような形で再構成しようとする (cf. 5-7)。この再構成は、以下で詳しく確認するように、フッサールが私と同等な他者について一定の議論を構想していたことを示す点で、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判への反論にあたる。

① 原初的領分の解釈

鈴木によると、原初的領分とは、「私の具体的存在」すなわち「モノド」から、異他的なる主観についての構成的な働きを差し引いたものである (cf. 217-219)。鈴木はこうした領分に含まれているものを、フッサールが1920/21年の草稿で論じたモノドの固有性と結びつけて、明確にしている。鈴木によれば、同草稿ではモノドの固有性が、「感覚与件をはじめとした『ヒュレー』と、それによる触発に対する習慣的な能動の仕方としての『固有のあり方』」によって特徴づけられている (cf. 219)。つまり、そのつど固有なヒュレーによる触発と、ヒュレーを何として把握しそしてそこからどのような作用を遂行するかという「能動 (Aktion)」に関して習慣化された「固有のあり方

⁴ 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

(Eigenart)」 (= 人格性)、これらに基づいてモナドは、「自我によって統一された体験流」として個体化されている (cf. 205-208)。こうした考え方が『デカルト的省察』にも受け継がれていると、鈴木は解釈する。すなわち、同書でも、モナドとは「固有のヒュレーと習慣性によって成立する諸体験からなる『顕在的あるいは潜在的な体験流』と『自我』との統一体なのである」 (cf. 219; Hua I, 134)。ただし、鈴木によると同書では、固有なものの範囲が1920/21年の草稿より厳密に区切られている (cf. 219)。つまり、モナドにおける体験流には志向的に構成されたものもその内容として属しているが、これは構成の順序において他者の存在を前提していないという意味で「原初的」だとされており、異他的な主観との関係が断ち切られたものとなっているのである。

② 移入理論の再構成

鈴木によると「第五省察」での移入理論では、伝達 (= コミュニケーション) の場面は考慮に入れず、私が他者の身体を見出す場面に着目して、他者経験が説明される。すなわち、その理論では、私の身体と類似したものが私の眼前に現れた際、それに伝達の意図が具わっているかどうかに関わらず、それは他者の身体として構成され、そこに私とは別のモナドの現実存在が確信されると、フッサールは説明する。

上述のように再構成する中で鈴木は、対象に移入されるものを、私の可能的経験だと理解している (cf. 164-167, 171-172, 212)。すなわち、他者のいるそこに私がいれば私ももつであろう感性的経験、諸感覚、感情、こういったものが移入されると、鈴木は理解している。

また、鈴木によるとフッサールは、上の移入における意識の働きとして、「付帯現前化」という能動的働きと、「対化」という受動的働きとを見出している (cf. 219-221)。これらについて鈴木は、次のように理解している。付帯現前化とは、他者の身体の物的側面が現前している際、その心的側面がそれに付帯する仕方でも現前している事態を指す。また、対化とは、私に私の身体を統握させるようなヒュレーの領分と、私に他者の身体を統握させるようなヒュレーの領分とが、それらの類似性にもとづいて、能動的な統握に先立つ受動的な段階で総合される事態を指す。

鈴木によれば、フッサールは上述の対化を、そこでの移入の根拠と見定めている。つまり、上述の対化が妨げなく進行しているかぎり、私は、私の身体と類似した眼前のものを、私の身体と対をなすものとして統握するよう促され、それに私の可能的経験が移入される (cf. 166, 219-221)。このように、私が自分の身体とよく似たものを発見しさえすれば、ただちにそうした移入が成立するのであり、そのために他者からの何かしらの伝達が必要とはされていないと、鈴木は理解している。

なお、次の項目の中で詳しく確認するように、鈴木によると「第五省察」の移入理論は、フッサール他者論全体の一部にすぎない (cf. 228)。すなわち、フッサールはその移入理論を基礎として、さらに伝達における他者経験の理論を構想していたと、鈴木は解釈するのである。

③ 反論の要点

鈴木は、フッサール他者論へのトイニッセンやヴァルデンフェルスの批判に反論しており、これが(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判への反論に相当する。

鈴木によれば、トイニッセンやヴァルデンフェルスは、フッサール現象学には「伝達」あるいは「対話」についての議論が欠けていると、批判している (cf. 118-119)。すなわち、トイニッセンによれば、フッサールの移入理論では、他者は対話の相手である「君 (Du)」としてではなく、あくまで「他の私 (anderes Ich)」として扱われているにすぎない。また、ヴァルデンフェルスによれば、フッサールの移入理論では、私と「君」との「等根源的な近さ (die ursprüngliche Nähe)」や「地位の等しさ」が捉えられていない。鈴木によるとこれらの批判は、フッサールが『論研』第一版で呈示した志向性概念と関係している (cf. 116-118)。つまり、鈴木も認めるように、そこでの志向性概念は、独白的表現だけを想定したものであるため、それを伝達の場面には適用しがたいのである。

上述の批判に対して鈴木は、フッサール他者論についての草稿が公開された現在ではもはや通用しない、と反論している (cf. 118-120, 294)。というのも、簡潔に言えばフッサールは、『論研』第二版のために第一版の書き換えを試みた1913年の草稿において、志向性概念を修正・拡張したうえで伝達による相互理解を分析しており、そして、その成果を踏まえて、1932年の草稿「伝達の共同体の現象学」⁵の中では、伝達の場面で対話の相手となる「君」について論じているからである (cf. 254-256)。こうした思索の展開を、鈴木は以下のように詳しく追跡している。

鈴木によると、フッサールは『論研』第一版の書き換えを試みた際、第一版では独白的表現を想定して呈示していた志向性概念を、伝達的表現も考慮したものへと修正・拡張した (cf. 119-120, 127, 156)。すなわち、意味の充実を説明するモデルが、「意味志向 (表意的志向)」と「直観的志向」を用いたものから、その二項に「記号的志向」を加えて修正したものへと変更された。この新たなモデルについて、鈴木は次のように解釈している。記号的志向とは、「表現を受けとること (=伝達意図の告知を受容すること) によって始まり、表現の意味の理解を目指す志向」である (cf. 138)。例えば、声がよく聞こえなかったり文字が消えかけたりしている場合には、その表現の意味が即座に理解できず、その理解が目指されることになる (cf. 137-138)。このような志向は、伝達的表現を考慮することではじめて見出されるものであり、主観にとってすでに意味が理解されている独白的表現では生じえない (cf. 139)。また、意味志向とは、「理解された意味を介して対象に向かう志向」であるが (cf. 138)、この志向では対象が直観的に捉えられておらず、対象への志向は空虚である。例えば、窓の外を見ずに雨が降っていると思っているとき、「雨が降っていること」

⁵ この題目は鈴木による略記に倣った。正確な題目は、鈴木訳によれば、「単なる感情移入の共同体 (単なる、互いに並んであること) に対置される伝達の共同体の現象学 (語りかけとしての語りと、語りの受容)。現象学的人間学について。経験 (ドクサ) と実践について」である (cf. 305)。

という意味は空虚に志向されている (cf. 40)。これに対して、直観的志向とは、対象そのものへと直観的に向かう志向であり、これによって意味志向が充実する。上の例に照らすと、実際に窓の外を見て雨が降っていることが確認できれば、「雨が降っていること」という意味は、思念されただけの空虚なものではなく、充実されたものとなる (cf. 40)。

また、鈴木によるとフッサールは、上と同じく『論研』第一版の書き換えを試みた際に、伝達による相互理解の過程を分析しており、そこに「聞くこと」、「理解すること」、「判断作用を移入すること」、「共に判断すること」、これら四つの作用を見出している (cf. 146; Hua XX/2, 38)。鈴木はそれぞれを次のように解釈している。「聞くこと」とは、「伝達意図の告知を受容する（受け取ったものを表現と見なす）ということ」である (cf. 148-149)。すなわち、ここでの「聞くこと」は、単に音を知覚することではなく、文字や手話など声以外の表現も含めて他者からの何かしらの「語りかけ (Anrede)」を受容することである。「理解すること」とは、受け取られた表現の指す判断内容 (= 命題) の意味を、先述の記号的志向の働きにおいて理解することである (cf. 148-149)。「判断作用を移入すること」とは、理解された判断内容に対応する特定の判断作用をその送り手が遂行していると認めること、言い換えれば、声や文字という表現を介して、その判断作用が遂行されたという告知を受容することである (cf. 149)。「共に判断すること」とは、上のように特定の判断作用を移入したうえで、その判断作用と同様の判断作用を表現の受け手も遂行することであり、これは、その判断の対象となっている事態をその受け手が確信することによって成り立つ (cf. 144-145, 147)。先述の例に照らせば、「雨が降っている」という判断が伝達された際に、聞き手は、相手の言葉をそのまま信じるにせよ、自分で窓の外に目を向けて直観的に捉えるにせよ、実際に雨が降っているという確信を持てば、その表現の送り手と同様の判断作用を遂行していることになる (cf. 144-145)。

上述を踏まえて鈴木は、告知の受容を他者経験と理解し、フッサールが分析した他者経験を、「感情移入 (Einfühlung)」、「語りかけの受容 (Aufnahme der Anrede)」、「思考移入 (Einverstehen)」これら三つに大別している (cf. 152-155)。鈴木解釈によれば、フッサールは、他者の体験を与える働きを、『論研』の頃から一貫して「告知 (Kundgabe)」と呼び、それを受容することが他者経験に共通した特徴だと見做している (cf. 34, 78-79, 152-154)。そして、鈴木は「感情移入」、「語りかけの受容」、「思考移入」をそれぞれ次のように説明している。感情移入は、「第五省察」で扱われた他者経験であり、「非意図的な身体運動あるいはその産物による告知の受容」と定義される (cf. 155)。すなわちそれは、前項目で確認したように、私の身体と類似した眼前の対象が私とは別の身体として構成される他者経験であり、伝達の場面における他者経験ではない。語りかけの受容は、「意図的な身体運動あるいはその産物による告知の受容」の中でも、「伝達の意図の告知の受容」と定義される (cf. 155)。すなわちそれは、先述の「聞くこと」に相当する (cf. 147-149, 155)。思考移入は、「意図的な身体運動あるいはその産物による告知の受容」の中でも、「伝達の表現による任意

の作用の告知の受容」と定義される (cf. 155)。すなわちそれは、先述の「判断作用を移入すること」に相当するが、思考移入において移入される思考作用には、判断だけでなく、意思、疑問、願望といった、様々な思考作用が含まれる (cf. 145-146, 149)。なお、「語りかけの受容」という語は1932年の草稿「伝達の共同体の現象学」の中で (cf. 149, 241-242; Hua XV, 476)、また、「思考移入」という語は『論研』第二版のために第一版の書き換えが試みられた1913年の草稿や『デカルト的省察』の中で (cf. 143, 225-226; Hua XX/2, 35; Hua I, 158)、フッサールがそれぞれ用いたものである。

鈴木によれば、「第五省察」では、感情移入のみが扱われており、伝達の場面における他者、すなわち対話の相手となる「君」が、どのように意識されるようになるかについては論じられていない。つまり、「第五省察」が執筆された時点でフッサールは、伝達に関する他者経験の理論の構想を持っていたが、それは「第五省察」では示唆されるにとどまったと、鈴木は解釈している。

しかし、鈴木によれば、フッサールは1932年の草稿「伝達の共同体の現象学」で語りかけの受容を扱った際、上の「君」がどのように意識されるようになるかについて論じている。すなわち、私が何かしらの語りかけを受容するかぎり、たとえその語りの意味が理解できなくとも、私は語りかけてくる相手を「君」として意識している、と。

第3節 アントニオ・F・アグィーレ『フッサール現象学——現在の解釈と批判からの照明』

アグィーレは『フッサール現象学』⁶の中で、(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判、(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判、これらそれぞれに反対する議論を呈示している。同書の目的は、フッサールに関する特に重要ないくつかの先行研究と対決することにある (cf. 1/1)。同書でアグィーレは、フッサールが構想した超越論的現象学の立場に立つ (cf. 1/1)。アグィーレによると、「現象学が超越論的になるのは、それが意識における現実の主観的現出を記述するに際して同時にこのことを意識による現実の構成として呈示する場合である」(2/2)。つまり、簡潔に言えば、上の超越論的現象学の立場とは、意識において現実が構成されると見定める立場を指す。アグィーレは、超越論的現象学に関するいくつかの批判に応答することを通して、超越論的現象学の立場を擁護しようとする。こうした中でヴァルデンフェルスとヘルトの批判が、それぞれ取り上げられる。アグィーレがヴァルデンフェルスの批判を取り上げる理由は、それが超越論的現象学そのものに異議を唱えているところにある (cf. 5/5)。また、ヘルトの批判を取り上げる理由は、それがフッサール他者論を超越論的現象学の枠内で修正しようとしているところにある (cf. 150/174)。

⁶ 本項に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、原著の頁数、邦訳の頁数の順にスラッシュで区切って括弧内に示し、文中に記す。

① 原初的領分の解釈

アグイーレは原初的領分を、他者経験との共働なしに構成されたものだと、解釈している (cf. 34-35/41)。すなわち、万人にとってという意味での客観的なもの、世界的なもの、自然界的なものではなく、私固有の領分である。アグイーレはその領分の原初性を、ヘルトに倣って規定している (cf. 150/174-175)。アグイーレによると、ヘルトは1930年のフッサールの草稿を引きながら、原初性を「私が固有な現前として実現できる」(Hua XV, 125) という性格として解釈している (cf. 150/175; Held [1972, 31])。つまり、原初的領分は私に直接現れるものに限られた領分だと見做されており、アグイーレもヘルトのそうした解釈を受け入れるのである。

② 移入理論の再構成

アグイーレによると、フッサールの移入理論とは、他者が私の原初的領分を超越したものとして経験されることを、移し入れという形式で受動的に生じる類比的統覚の働きとして、説明するものである (cf. 34-37, 39/41-44, 46)。より詳しく言えば、アグイーレはこの移入理論を次のように再構成している。他者経験は、私の身体と類似した物体が眼前に現れることで引き起こされる。すなわち、そうした物体が現れると、それも私の身体と同様な身体であるということが、私からの類比的な移し入れという形式において統覚される。これと同時に、その物体を媒介ないし担い手として、他者の心的生が付帯的に現前化(統覚)される。この際、眼前の対象は、私と同様な主観として現われるのであり、より正確に言えば、「人間」ないし「友」、「身内」、「上司」等として現れる。このようにアグイーレは再構成している。

こうした再構成においてアグイーレは、対象に移し入れられるものを、「自我の概念に含まれるすべての権利、私のもつすべての権利」だと理解している (cf. 42-43/50-51)。簡潔に言えば、その対象も私と同様に構成の絶対的な中心であり、そこでは私を他者として構成できるという権利、これが移し入れられるのである。

アグイーレの理解によると、上述の権利を対象に移し入れ、その対象を私と同様に絶対的な主観として承認する意識の働きが、移入理論で呈示された類比的統覚である (cf. 39, 42-43/46, 50-51)。これに関してアグイーレは、次のように論じている。フッサールは、他者が移し入れという仕方で類比的に統覚されることから、他者を私の自我の変様された「反復 (Wiederholung)」(Hua I, 239) だと表現している。この反復は、その対象が私と同様に構成の絶対的な中心として、私にとって異他的で自立的なものだと認められることを意味する。このことは、他者が移入という仕方においてしか経験されえないことに示されている。すなわち、移入という仕方で対象には私と同等な権利が認められるとともに、その移入という仕方は、私が他者の心を直接的に捉えることはできない「他者の絶対的異他性」(51) を示している。このようにアグイーレは論じている。

また、アグイーレによれば、フッサールが上述の移入における根拠と見定めたものは、原初的に

経験される物体が私自身の身体と類似していることである (cf. 35, 155/41-42, 180)。アグイーレは、そのように類似した物体が眼前に現れることで、上の意識の働きが動機づけられると、理解している (cf. 156/182)。こうした理解については、後でヘルトの批判に対するアグイーレの反論を整理する際、詳しく確認する。

③ 反論の要点

本項目では、フッサール他者論へのヴァルデンフェルスの批判とヘルトの批判それぞれに対して、アグイーレがどのように反論しているのかを整理する。ヴァルデンフェルスへの反論が (A) 〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判への反論に相当し、ヘルトへの反論が (B) 〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判への反論に相当する。

(a) ヴァルデンフェルスの批判に対する反論

アグイーレによるとヴァルデンフェルスは、フッサール他者論は独我論に陥っていると、批判している (cf. 32, 41-42/38-39, 49-50)。この批判についてアグイーレは、以下のように理解している。その批判の論拠は、フッサール他者論が「他者の対象化」(cf. Waldenfels [1971, 52, 54ff]) に終始するという、ヴァルデンフェルス自身の想定にある (cf. 31, 34/37, 40-41)。すなわち、ヴァルデンフェルスによればフッサール他者論は、他者が世界の中の事物として現れることで志向の対象になっていることを前提している。(cf. 31-33/37-40)。このことは、フッサール他者論が独我論に陥っていることを意味する。というのも、他者を世界の中の対象とすることで、他者は私と同化することなく私に対する異他性を保てるが、しかし、そのことによって他者は現実的な共主観という地位、すなわち私との等根源性を保てなくなるからである (cf. 32, 41/38-39, 49)。つまり、他者は私によって志向的に構成されるものとして私と同等ではなく、私は他者を志向的に構成するものとして他者よりも上位に位置づけられる (cf. 10, 19, 41/10, 22, 49-50)。このように、「根源的な汝が向かい合わぬ構成する原自我に一方的に重きを置くことは、私を根本において仲間なしにする」(Waldenfels [1971, 28]; cf. 41/49)。以上のようにヴァルデンフェルスは批判したと、アグイーレは理解している。

しかし、アグイーレは、上述の批判はいつくかの不適切な解釈のうえに展開されていると、見做している (cf. 33/40)。

まず、アグイーレによると、フッサール他者論が「他者の対象化」に終始するというヴァルデンフェルスの想定は、不適切である (cf. 34-37/40-45)。これについてアグイーレは次のように論じている。たしかに、フッサールは、他者経験をひき起こすもの、ないしはその担い手を、物体だと認めている。しかし、その物体は、世界の中の事物として構成されたものではなく、私の原初的領分において現れた限りでの物体を指す。他者経験では、そうした物体はあくまで構成を媒介するものとなっており、そこで直接出会われているものは、「人間」ないし「友」や「上司」等である。

つまり、フッサールは、他者が人間として私と同等なものとして構成されていることを前提しており、他者の存在意味を世界内の事物という存在意味と同一視してはいない。ヴァルデンフェルスはこれを見落として上のように誤った想定をしたと、アグイーレは指摘するのである。

また、アグイーレによるとヴァルデンフェルスは、統覚としての志向的構成に主観的主導権という優位形式が具わると、誤解している (cf. 19-22/22-25)。これについてアグイーレは次のように論じている。たしかに、何かが構成されるためには、それが志向の対象として意識されておかねばならない。とはいえ、このことは私が構成において主導権をもつことを意味するわけではない。というのも、構成は或る対象が私を触発することではじめて成り立つのであり、その対象は触発するものとして先なるものである。つまり、その触発するものは私に意識されてはいても、私はそれを自分で作り出すことはできず、私はそれがあまに受け取るほかない。他者経験に照らせば、先述のようにそこでの対象は、私と同等な主観として、より正確に言えば「人間」ないし「友」や「上司」等として、受け取られる。このように「超越論的現象学は構成を明確にひとつの過程として、すなわち自我自身によって完全な自給自足で進むのではなく、自我において現実的なものによって呼び起こされる過程として理解している」(20/23) のであり、構成において私に優位形式が具わるとは認められてはいない。ヴァルデンフェルスはこうした点を見落として上のように誤解したと、アグイーレは指摘するのである。

さらに、アグイーレによれば、フッサールが呈示した「原自我」は独我論を導くものではない。これについてアグイーレは、次のように論じている (cf. 41, 43-45/49-50, 52-53)。たしかに、フッサールは『危機』において「原自我としての私が、私の超越論的他者という地平を構成するが、この超越論的他者は世界を構成する超越論的間主観性の共主観である」(Hua VI, 187) と述べており、原自我が他者を構成することを認めている。しかし、原自我は、他者の上位に位置づけられるものとしても、私と他者との等根源性を喪失させるものとしても、呈示されていない。というのも、原自我は「唯一性」(Hua VI, 188) を具えたものとして、呈示されているからである。ここでの唯一性とは、あらゆるものが構成される絶対的先行性として唯一であり、この絶対的先行性ゆえに他の何ものとも比較されえないことを意味している。すなわち、その唯一性は、他者と比較して私が上位であることを含意しておらず、原自我としての私が認められたからといって、他者が他の原自我として等根源的でありうるものが排除されるわけではない。このようにアグイーレは論じている。

アグイーレは以上の指摘に基づいて、ヴァルデンフェルスの批判を斥ける。すなわち、アグイーレによれば、フッサール他者論は「他者の対象化」に終始しておらず、また、フッサールは志向的構成に主観的主導権という優位形式を認めていないのであるから、ヴァルデンフェルスの独我論的批判はフッサール他者論に適用できないのであり、その批判をフッサールの呈示する原自我によって支持することも、原自我の唯一性からしてできないのである。

(b) ヘルトの批判に対する反論

アグイーレによれば、ヘルトは、フッサール他者論では原初の領分を超えて現実の他者に至りうることが示されていないと、批判している (cf. 150-153, 163/175-178, 191)。簡潔に言えば、アグイーレはヘルトの批判について、次のように理解している。ヘルトによるとフッサールは、私の身体に似た物体が眼前に現われた際、「私がそこにいるときのよう」 という準現在化の意識が働き、この意識において予期されたことがその物体の事実に合致すれば、その物体は現実の他者として定立される、と考えた。この見解に対してヘルトは、そのようにして定立されるものは私の疑似的な変態にすぎないと、批判する。つまり、ヘルトによれば、「私がそこにいるときのよう」 という準現在化は単なる想像であり、上の合致が成り立っていても、その想像において表象されたものから虚構的性格が取り除かれはしない。アグイーレはヘルトの批判をこのように理解している。

しかし、アグイーレによるとヘルトは、フッサールが他者経験における準現在化を動機づけられたものとして呈示したことを、見落としている。このことをアグイーレは、ヘルトが典拠とした草稿に照らして、次のように指摘する (cf. 153-157/178-183; Held [1972, 40-41])。たしかに、その草稿でフッサールは、他者経験における準現在化に「かのように (Als-ob)」 という性格が具わることを認めている。しかし、その準現在化における表象は、「私の身体物体と類比的なそこに今ある物体によって動機づけられている」 (Hua XIV, 501)。すなわち、「この〈かのように〉は恣意的なものでも、単なる想像でもなく、そこにある物体の経験された外見によってたえず規定されることを要求されており、この規定は、充実されるたえず新しい地平を伴いながら、確信のうちで定立的になされる」 (Hua XIV, 500)。このようにフッサールは他者経験における準現在化を単なる空想として呈示していないと、アグイーレは指摘するのである。

アグイーレによるとフッサールは、他者経験における準現在化が眼前の身体物体によって動機づけられているからこそ、そのように準現在化されたものを、「空虚な可能性」 (Hua XIII, 312) ではなく、「実在的な可能性」 (Hua XIII, 312; Hua XV, 251, Fußn. 1) ないし「現実的な可能性」 (Hua XIV, 500) だと見做している (cf. 156-161/182-189)。アグイーレはこうした可能性の区別を、主に『第一哲学II』と『イデアーンI』を典拠として、事物経験に関するフッサールの分析成果の中から、次のように引き出している。フッサールによると、個々の知覚される事物は、そこでは現れていなくとも経験可能な諸部分を無際限に伴っており、こうした地平についての準現在化が、個々の事物についての知覚に動機づけられた仕方ではひき起こされる。それゆえ、その地平についての経験可能性は、「決して空虚な論理的可能性ではなく、経験連関において動機づけられた可能性を意味する」 (Hua III/1, 101)。すなわち、「その可能性は単なる空想可能性ではなく、定立的な妥当意識によって支えられている」 (Hua VIII, 148) のであり、実在的な可能性ないし現実的な可能性である。アグイーレはこのように解釈したうえで、他者経験における準現在化が事物経験における準現在化と共通の構造を具えていると見定める。すなわち、他者経験においても、私の原初の領分において知

覚された物体が、他者の心的生に関する準現在化を動機づけており、ここで準現在化されたものは、「現実的な可能性」を具えたものとして定立されるのである。

アグイーレは以上の指摘に基づいて、ヘルトの批判を斥ける (cf. /188-190)。つまり、アグイーレによると、フッサールが他者経験における準現在化を動機づけられたものとして呈示しているからには、その準現在化を疑似-定立的なものに見做すことはできないのであり、フッサールの移入理論で説明された他者は、虚構的な他者ではなく、現実的な他者にほかならないのである。

第4節 浜渦辰二『フッサール間主観性の現象学』

浜渦は『フッサール間主観性の現象学』⁷の中で、(C)〈分析の不徹底〉を指摘する批判に明示的に反論してはいないが、この批判からフッサールを擁護する見解を同書の議論に基づいて呈示できる。同書の目的は、フッサールが問題にしようとした他者とはどのようなものだったのかを明確にするとともにあり (cf. 7)、そのために浜渦は、フッサールの公刊著作だけでなく広く草稿も典拠としながら、様々な観点からフッサールの他者論を検討していく (cf. 12)。こうした中、同書第7章では、他者経験の構造への問いと他者経験の発生への問いとの関係を中心に、「第五省察」の他者論が取り上げられる (cf. 164)。浜渦によれば、他者経験とはそもそも何であるのかというその構造への問いと、他者経験がいかにして生じるのかというその発生への問いとは、密接に交錯しながらも、安易に混同されてはならない二つの別のことである。両者の関係について浜渦は、フッサールが呈示した静態的分析と発生的分析に基づいて論じる。浜渦の解釈によると、静態的分析とは、構成する意識と構成される対象の相関としてすでに出来上がった静態的な構造を分析することであり、発生的分析とは、静態的な構造を手引きとして、その構造そのものの時間的な発生を分析することである (cf. 175-177)。浜渦によるとフッサールは、発生的分析による現象学を構想していたにもかかわらず、「第五省察」では発生的分析を十分に展開しなかった (cf. 176-177, 179)。この点に対して浜渦は、明確な評価を与えてはいない。しかし、本節で詳しく確認するように、そうした分析の不徹底を指摘する (C) の批判に反対する見解を、静態的分析と発生的分析の関係に関する浜渦の解釈から引き出すことができる。

① 原初的領分の解釈

浜渦の解釈によれば、原初的領分とは「根源的な我」⁸にとっての領分である。より詳しく言えば、これは次のように解釈されている。私たちが世界を客観的・超越的なものとして経験しており、世

⁷ 本節に限り、同書からの引用箇所および参照箇所の指示は、頁数を括弧内に示し、文中に記す。

⁸ 浜渦は Ur-ego の訳語にも Ur-Ich の訳語にも「根源的な我」をあてる (cf. 167, 297)。本論のこれまでの整理では、Ur-Ich の訳語を「原自我」に統一してきたが、本節の整理では、浜渦が Ur-ego と Ur-Ich の訳語を区別していない点を踏まえて、「根源的な我」をそのまま用いた。

界経験はつねに他者への関係を含み、暗黙のうちに他者経験によって媒介されているということ、これをフッサールは自明なことだと見做していた (cf. 167-168)。「第五省察」では、そうした世界経験の根柢への問い、すなわち「客観的世界の超越論的な問題」(Hua I, 121)との連関において、他者経験が取り上げられている (cf. 170)。つまり、ここでのフッサールの主な関心は、世界が経験される際の構成の秩序において、他者経験がどのような役割を占めるのかにある (cf. 170)。そこでまずフッサールは、他者がいかんにして根源的に経験されるかを浮き彫りにするために、俎上に載せられた他者経験をひとまず遮断する。すなわち、他者を度外視し、私たちの経験から他者に負っているものを捨象する。こうしたラディカルな抽象によって、私に固有な原初的領分がもたらされる。つまり、ここでの私は、他者への関係をまったく含まず、他者との相関において複数として考えられることのできない私であり、こうした根源的な我にとっての経験とその世界が、原初的領分として浮き彫りにされる。このように浜渦は原初的領分を解釈している。

② 移入理論の再構成

浜渦はフッサールの移入理論を、フッサール他者論全体の根底に位置づけて再構成している。浜渦によると、フッサールにおける移入とは、「身体的意味を理解するという仕方での『他者の直接的経験』」であり、そうした身体的意味の理解が成り立つためには、眼前の対象が他者の身体として統覚されておかねばならない (cf. 240)。「第五省察」の移入理論で特に扱われたのはこうした統覚だと、浜渦は見定めている。

上の再構成において浜渦は、私が広く直観的に感じていることが対象に移入されると理解している (cf. 246-247)。すなわち、浜渦の理解では、移入されるものは、「知識」や「意志」と同列にある「感情」のような、或る特定の領野に限定されているわけではない。なお、浜渦によると移入では、私の感じていることを眼前の対象に移し入れるだけでなく、他者の感じていることが眼前の対象の身体的表現を介して受け取られてもいる (cf. 247)。このように移入には、「感じ入る」ことと「感じ取る」ことの両面性があると、浜渦は強調している。

このような移入における意識の働きとして、準現在化的経験を浜渦は浮き彫りにしている (cf. 173-175)。浜渦の理解によると、それは、『「私はそこに行くことができる』という私の身体のキネステーゼ的可能性 (Vermöglichkeit) (Hua I, 146) と、私の身体と他者の身体の『対化 (Paarung)』という受動的綜合 (Hua I, 141f., 147) に動機づけられた『一つの新しい類型の準現在化』 (Hua I, 145)』(174)としての経験であり、付帯現前化という性格をもっている。すなわち、その経験は、単なる想起や予期や想像のような任意の準現在化ではなく、眼前の対象が私の原初的世界における物体として現前するとともに、これに要求されるかたちで、その対象が他の原初的世界における身体として付帯現前化することも同時に成立する経験だと、浜渦は理解している。

浜渦によれば、私の身体のキネステーゼ的可能性と、私の身体と他者の身体の対化という受動

的総合とが、上述の移入における根拠である (cf. 174)。すなわち、前段落で確認したように、それらが移入における意識を動機づけるように働くと、浜渦は理解しているのである。

③ 反論の要点

本項目では、(C)〈分析の不徹底〉を指摘する批判に反対する見解を、静態的分析と発生的分析の関係に関する浜渦の解釈に基づいて呈示する。

浜渦によれば、静態的分析と発生的分析とは、「相互補完的關係」にある (cf. 176-178)。静態的分析は、至る所で発生の問題に突き当たり、発生的分析によって補足される必要が露呈してくる。すなわち、静態的な考察は発生的な考察によって深化される。他者経験の分析に照らして言えば、「原初的な経験に基づけられた間主観的経験という静態的な層的〈構造〉そのものの〈発生〉が問われることになる」(177)。このように要求される発生的分析は、静態的分析によって明らかにされた静態的構造を手引きとして必要とする。すなわち、発生的分析では、静態的構造の時間的発生を追うにあたって、その構造がもつ層的構造が手がかりとなる。それゆえ、発生的分析へは静態的分析を経てから進むことになる。この順序は、フッサールの思索上の発展に基づくのではなく、哲学的考察の秩序、つまり、誤った道に入り込まないために守るべきものである。

ただし、浜渦によると、静態的分析が発生的分析によって補完される必要があるとしても、静態的分析のみでは何の成果も得られないというわけではない (cf. 178)。すなわち、それらの分析は相互補完的ではあっても二つの別のものであり、静態的分析は発生的分析によってとって代わられるものではなく、それ自体で一定の成果をもたらす。

上述を踏まえたとて浜渦は、「第五省察」の他者論が静態的分析にとどまっていることを指摘し、その理由をそこでのフッサールの問題関心に見出している。すなわち、浜渦は次のように解釈する。「第五省察」で他者経験に向けられたフッサールの問題関心は、世界が客観的な世界として経験される場面に他者経験がいかに関与しているかを、静態的構造として明らかにすることにあった。それゆえ、「第五省察」の他者論は主に静態的分析にとどめられた。たしかに、フッサールは、「第五省察」の他者論を「静態的分析」(Hua I, 136)と断りながら、いくつかの発生的概念を持ち込んでいる。とはいえ、これは、フッサールが二つの分析の方法を混同してしまっていることを示すのではなく、むしろ、静態的な分析がそれだけでは完結しえず、必然的に発生的な問題への遡行を要求するということを示している。「第五省察」ではこうした要求にフッサールは応えようとはせず、あくまで上の問題関心に従って静態的分析を展開した。このように浜渦は解釈している。なお、浜渦は「第五省察」のどこに発生的概念が持ち込まれているかについて、具体的に立ち入ってはいない⁹。

⁹ 「第五省察」に発生的現象学の基本概念が持ち込まれていることについては、例えばリーが詳しく論じている (cf. Lee [2002, 168-169, 172-178])。リーによれば、特に原初的領分という概念は、静態現象学的にも発生的現象学的にも用いられる曖昧な概念である。こうした解釈に関しては、また別の機会に改めて検討したい。

以上の浜渦の解釈を踏まえれば、「第五省察」の他者論において発生的分析が不徹底であり、主に静態的分析にとどまっていることは、批判的に受け取られるまでには至らないだろう。つまり、次のような見解が呈示できる。静態的分析と発生的分析とは、相互補完的關係だといえ二つの別のものであり、静態的分析はそれ自体で一定の成果をもたらす。それゆえ、「第五省察」の他者論において発生的分析が十分に展開されていないとしても、このことはそこでの他者論の根本的欠陥を示すわけではない。しかも、「第五省察」の他者論においてフッサールの問題関心は、世界が客観的なものとして構成される際に他者経験がいかに関与しているのかを、静態的構造として明らかにすることに向けられていた。こうした問題関心に応じて「第五省察」の他者論は静態的分析にとどめられたのであり、静態的分析から発生的分析へと進むべきである点からしても、静態的分析にとどめられたことは手順として妥当である。フッサールの問題関心を無視したうえで、「第五省察」の他者論において発生的分析が徹底されていないと批判するのは、不当であろう。

第5節 フッサール他者論に対する批判と擁護についての比較検討

本節では、ここまでの整理を踏まえて、フッサール他者論に対する批判と擁護を比較検討し、特に「第五省察」の他者論に関する議論の余地として、他者経験における動機づけ連関が残されていることを示す。そのために以下では、(A)〈私と同等な他者の不在〉、(B)〈現実的な他者の不成立〉、(C)〈分析の不徹底〉、これら三つの問題系ごとに、考察を進める。

(A)〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判に対しては、有力な反論が呈示されたと見做すことができる。「先行研究の整理(1)」で整理したように、(A)の批判を呈示した代表的な論者はトイニッセンやヴァルデンフェルスであり、彼らは次のように論じていた(cf. 佐藤 [2021, 216-221])。フッサールは自我に他者よりも絶対的に優位な身分を認める以上、フッサールの他者論では、私と他者との同等性を説明することはできず、私と同等な相手としての「君」との対話や伝達に関する議論が欠けることになる、と。しかし、本論第1節と第3節で確認したように、田口やアグィーレによると、自我に関するフッサールの議論を丹念に解釈すれば、フッサールは自我にそのような優位性を認めていない。さらに、本論第2節で確認したように、鈴木によると、伝達に関するフッサールの草稿を丹念に追跡すれば、フッサールは志向性概念を修正・拡張して、上の「君」を説明していたということが示される。これらの反論を考慮すれば、(A)の批判は、少なくともこれまでに呈示されたかたちのみでは、もはやフッサールの他者論に適用できないだろう。

ただし、フッサール他者論において私と他者とが等根源的なものとして説明されうると解釈する場合、この解釈を保持した仕方で、フッサール他者論において他者の異他性がどのように説明されるかが呈示されねばならない¹⁰。というのも、他者の等根源性が他者の異他性を保持したかぎ

¹⁰ これを論点に挙げている先行研究として、斎藤 [1992, 13]、浜渦 [1995, 301-302]、を参照。

りでの同等性でなければ、他者は私の固有性に解消されてしまうからである。すなわち、その場合フッサール他者論は、私と別の者としての他者が構成されることについて説明できていないことになる。他者は私と同様な自我性を認められながらも私とは別の者として経験されるのであり、ここでの別であるという異他性について理解することが求められるのである。

(B)〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判に関しては、それほど有力な反論は呈示されておらず、反論の手がかりとして他者経験における動機づけ連関が呈示されるにとどまっている。「先行研究の整理 (1)」で整理したように、(B)の批判を呈示した代表的な論者はヘルトや斎藤であり、彼らは次のように論じていた (cf. 佐藤 [2021, 221-227])。フッサール他者論では、「あたかも私がそこにいるかのように」という準現在化の意識において眼前の対象が他者として捉えられ、この意識において予期されたことがその後の経験の進行と合致するならば、それは現実の他者として確かめられうると考えられたが、そうした確証が成り立っても、上の準現在化がもつ虚構的な性格を取り除くことはできず、他者が現実のものとして定立されることにはならない、と。しかし、本論第3節で確認したように、こうした批判に対してアギーレは、他者経験における動機づけ連関の役割を指摘することで反論した。ただし、これがどのような意識の働きであるかについて、アギーレは踏み込んで論じてはいない。

したがって、(B)の批判からフッサール他者論を擁護しようとするならば、他者経験における動機づけ連関について踏み込んで論じる必要がある。つまり、他者が構成される際、そこでの動機づけ連関において意識が何を根拠としているのか、これが明確にされねばならない。

他者経験における動機づけ連関は、他者の異他性にも関係しうる。というのも、動機づけとは、私が或るものに動機づけられるという受動性をその特徴とし、その或るものは私とは別のもの、すなわち異他性を示唆しているからである。つまり、動機づけ連関に着目すれば、異他性の構成において意識が何を根拠としているのかについても明らかにできよう。

(C)〈分析の不徹底〉を指摘する批判は、「第五省察」に対しては適用できないことが示された。「先行研究の整理 (1)」で整理したように、(C)の批判を呈示した代表的な論者は榊原であり、彼は次のように論じていた。「第五省察」の他者論では、原初的領分へと還元する手続き、他の身体の構成に関する分析、他のエゴの構成に関する分析、これら三点において、発生的分析が不十分なままに入り込んでいる、と (cf. 佐藤 [2021, 227-230])。しかし、本論第4節で確認したように、浜渦の議論に基づいて、次のような見解を呈示することができる。すなわち、静態的分析と発生的分析の関係および「第五省察」の他者論におけるフッサールの問題関心に照らせば、「第五省察」の他者論において発生的分析が十分に展開されていないとしても、このことはそこでの他者論の根本的欠陥を示すわけではない、と。もちろん、「第五省察」に限定せずフッサールの思索全体の中で、他者経験に対する発生的分析が実際に十分に展開されたのかどうかについては、改めて検討されるべきであろう。

おわりに

最後に、本論を簡潔に振り返ったうえで、今後の主な課題を簡単に示しておこう。

本論では、フッサール他者論を批判から擁護する先行研究を整理した。本論で取り上げられた先行研究は、「先行研究の整理 (1)」で大別した三つの区別、(A) 〈私と同等な他者の不在〉を指摘する批判、(B) 〈現実的な他者の不成立〉を指摘する批判、(C) 〈分析の不徹底〉を指摘する批判、これらそれぞれに対応するかたちで整理された。

さらに本論では、「先行研究の整理 (1)」と本論で整理した先行研究を比較検討し、フッサール他者論に関する議論の余地として、他者経験における動機づけ連関を浮き彫りにした。この動機づけ連関において、何が他者の現実性および異他性の根拠となっているのかを示すことができれば、フッサール他者論をより強く支持することができる。

今後の主な課題は、上の動機づけ連関について踏み込んで解釈することである。フッサールは動機づけ連関について多くの著作や草稿の中で論じている。本論で明確になった論点を念頭に、そうしたフッサールの議論を再検討すべきであろう。

文献

Aguirre, Antonio [1982]: *Die Phänomenologie Husserls im Licht ihrer gegenwärtigen Interpretation und Kritik*, Darmstadt. (川島秀一・工藤和男・林克樹訳『フッサール現象学——現在の解釈と批判からの照明』、法政大学出版局、1987年。)

Held, Klaus [1972]: “Das Problem Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie,” in: Ulrich Claesges und Klaus Held (hrsg.), *Perspektiven transzendental-phänomenologischer Forschung* (Phaenomenologica 49), Martinus Nijhoff, 3-60. (坂本満抄訳「相互主観性の問題と現象学的超越論的哲学の理念」、新田義弘・村田純一編『現象学の展望』所収、国文社、1986年。)

Husserl, Edmund: *Husserliana. Edmund Husserl Gesammelte Werke*, Nijhoff/Kluwer/Spinger, 1950ff. (「Hua」と略記し、巻数をローマ数字で、ページ数をアラビア数字で指示する。)

Lee, Nam-In [2002]: “Static-Phenomenological and Genetic-Phenomenological Concept of Primordality in Husserl's Fifth *Cartesian Meditation*,” in: *Husserl Studies* vol. 18, Kluwer Academic Publishers, 165-183.

Theunissen, Michael [1965]: *Der Andere. Studien zur Sozialontologie der Gegenwart*, Walter de Gruyter.

Waldenfels, Bernhard [1971]: *Das Zwischenreich des Dialogs. Sozialphilosophische Untersuchungen in Anschluss an Edmund Husserl*, Martinus Nijhoff.

斎藤慶典 [1992]: 「西欧近代哲学と他者——デカルト、カント、フッサールを中心に」、『中央学院大学教養論叢』第5巻、3-18頁。

—— [2000]: 『思考の臨界——超越論的現象学の徹底』、勁草書房。

榊原哲也 [2009]: 『フッサール現象学の生成——方法の成立と展開』、東京大学出版会。

佐藤大介 [2021]: 「フッサール他者論に関する先行研究の整理と比較検討 (1) ——フッサールへの批判を中心に」、『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』第52号、213-232頁。

鈴木崇志 [2021]: 『フッサールの他者論から倫理学へ』、勁草書房。

田口茂 [2010]: 『フッサールにおける〈原自我〉の問題——自己の自明な〈近さ〉への問い』、法政大学出版局。

浜渦辰二 [1995]: 『フッサール間主観性の現象学』、創文社。

